

東京

「其の口」暮らし」

＝ドイツ編＝



なじのじや

そろそろ雪が積もって雪かきに燃えている時期のはずなのに、まだ少ししか雪が降りません。今年の寒さは厳しいと聞いていたので「ココロの準備をしていたのですが、気温も6度から4度の間をうろつろしている位の暖冬です。

そんな暖かい冬といいながら大風邪を引きしばらく寝込んでいました。「病は気から」と言いつし自分の不摂生ぶりが露呈されていると思うとなおさら「早く治さねば」と気持ち焦りますが、ちっとも快方に向かっている気がしませんでした。それもそのはず食べなければ治る物も治りません。元気なときは「おいしい」と喜んで食べていたドイツの固いパンは噛むことも出来ず、かといつてうどんは乾麺すらもストックが無く、おかゆを作るにしてもご飯を炊くところから始めなければと思うと「もーいらん、寝かせてー」となってしまうのです。それでも何とか作って食べはしたものの、何を食べても味が無く、おいしくない。悲しくなるほどおいしく感じられない。目の前では旦那さんや息子がおいしそうにご飯を食べている。そんな人たちの前でおいしく感じられない自分がまた悲しい。そんな中、食料が尽きてきたのでふらふらしながら買い物に出かけました。そこで梨を発見したので。その名もNashi Birne（梨なし）。なんと梨がドイツにも売っていたのです。見た目は二十世紀梨の薄緑を薄黄色にした様な感じでちゃんとつぶつぶも付いているあの梨そのものなのです。ここで、このタイミングで梨に出会えるなんて!! リンゴに比べて少し高価でしたが、逡巡することなく三つ買いました。ようやく家に帰ったときには喉がカラカラに渴いていたので、まず腰を下ろして梨を食べてから次の作業に移ることに決めました。そして食べた梨は、みずみずしく今まで食べた物よりもおいしい物だったのです。たとえ匂いや味が分からなくても、ほんのり優しい甘みや噛むたびに実から出てくる果汁はいままさに自分が食べたいものだったのです。梨のおかげで少しずつ食欲も出てきて、またドイツの固いパンをおいしく食べることが出来るようになりまし



自分が望んで来て、住まわせて貰っているドイツですが、体が弱っているときに食べたくなるもの、食べて嬉しくなる物は日本で自分が馴染んでいた物なのだと実感したのでした。もっと若い頃は二年くらい日本食を食べなくても平気だったのに、これは加齢による心境の変化なのかしら？ と思えるくらいの余裕は出てきました。

PUKIPUKI・Z



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞